

4. 考 察

上野館跡第4次調査で発見された遺構と遺物について前項までに述べてきた。ここでははじめに記録として残されている上野館跡についてまとめ、次に発見された遺構・遺物の主なものについて検討を加えてみる。

(1) 記録に見られる上野館跡

上野館跡は寛永8年(1631)に茂庭家初代良元の下屋敷として築かれ、二代定元の明暦3年(1657)には作事を行い正式に居館として仙台藩の許可を受け、明治維新まで約230年の存続期間をもっている。館跡の規模を示す資料としては写真図版1に示す寛永年間の絵図・天和元年(1681)の絵図などがあり、前者では東西4間・南北68間、後者では東表85間・西裏84間・北脇72間・南脇67間で西南隅に東西4間・南北15間分の切り込みが示されている。また、表門は幅5間で屋根には鯨を飾り、館の四方には高さ1丈余の土塁と幅5間の道路が巡っていたとされている(茂庭家記録)。

第29図は明治39年に作成された幕末期の館内の建物配置を示す平面図である。仙台藩士の居館は領内統治の政治および儀式の場である大書院と大広間の2つの建物を中心として構成される「表」の建物群と、当主の居所である御座ノ間等からなる「奥」の建物群から構成され(佐藤:1979)、上野館跡では表門を入って左側に「表」の建物群が、右奥北西隅の一角に「奥」の建物群が位置し、藩主来訪の際に使用される「御成書院」が「表」の建物群の背後に位置している。

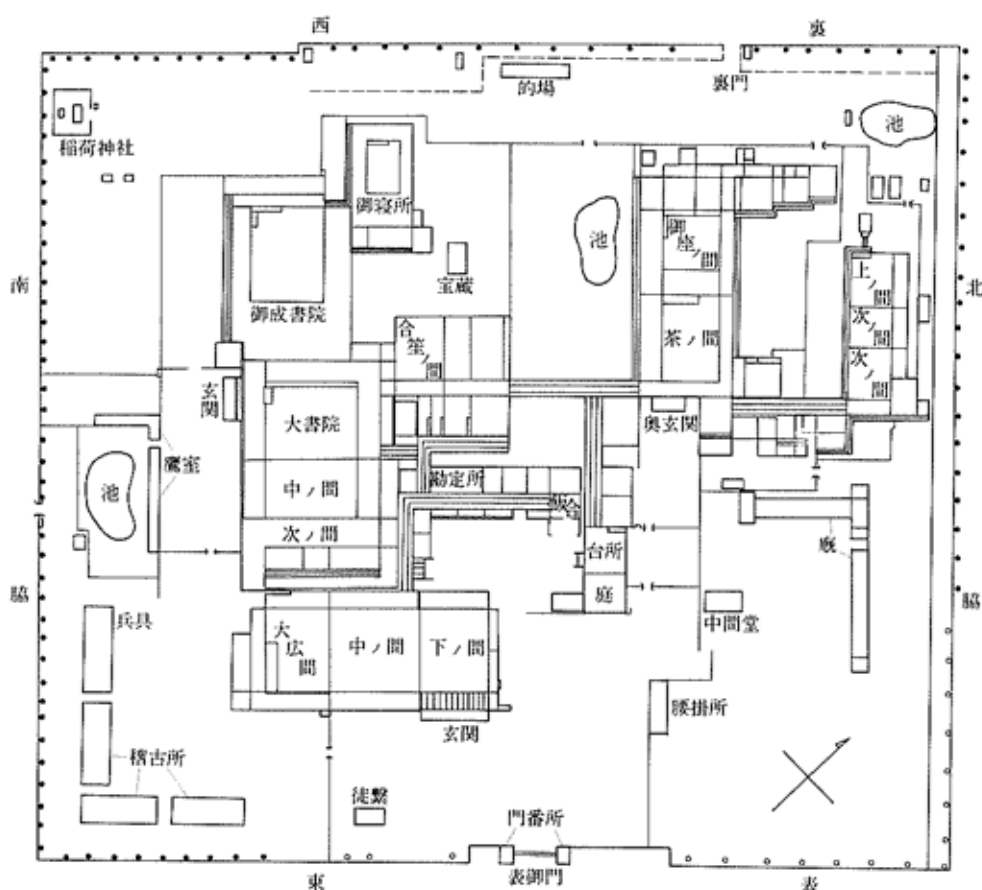
これらの建物群は下屋敷当初からその全容を備えていた訳ではなく、茂庭家記録に依ると貞享2年(1685)ころまでは簡素なものであったとされている。館内の大きな普請としては三代姓元の元禄元年(1688)の大書院・御広間・御座ノ間等の普請が知られ、このころに館内の建物は一新されたようである。また、元禄9年(1697)には稻荷神社の造営、元文元年頃(1736)には駒池等の大手(入口部分)の普請が行われ、元文2年(1737)には御成書院の存在等が知られる。

なお、これらの他にも館内の建物跡には全面あるいは部分的な改修を含む何回かの変遷があったものと考えられるが、記録からは明らかにされていない。

(2) 発見された遺構について

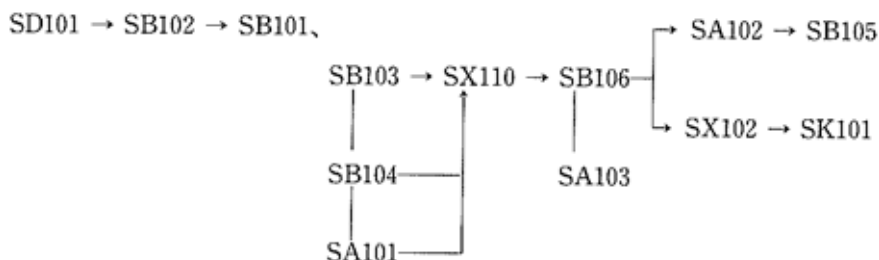
前項では記録に見られる上野館跡について述べたが、ここでは発掘によって明らかにされた遺構について、表門周辺の調査区であるD-1区を中心に若干の検討を行ってみたい。

D-1区で検出された遺構はS B 101 礎石建物跡、S B 102～107掘主柱建物跡、S A 101



第29図 松山旧城平面図（明治39年作成） 松山町史より抜粋

～103 柱六列、S D101 溝跡、S X101 通路跡などであるが、全容を把握できたものではなく、遺構に伴う出土遺物も極めて少ない。検出された各遺構には次のような重複関係が見られた。



ところで、第29図でこの地区の遺構を見ると、表門以外には両脇の門番所が見られる程度であり、建物跡の希薄な部分となっている。天和元年の絵図によると表門は屋根に鯨が飾られる瓦葺きのものであり、おそらく礎石建物跡と考えられる。該当する遺構として